



目下部鳴鶴の書

「捨てないで！」の愉楽

会員の、誰とは言わない、某細君などは「捨てないで!! (の活動) に行つてくる」と言う

来、地域の印刷資料の発掘が目的だが、こうした一緒にいたでいてくる付属物がなぜこの地にあるのか、「ここに

と念を押すそうだ。確かに、土蔵や埃まみれの書齋 (として使われていた部屋) に入ると、図書と一緒に

ある理由」を、仲間の推理を交えた解説を聞くのも、この活動の楽しみの一つである。

様々なモノが出てきて、「一緒に持つて行つてほしい」と言われると、断り切れずにもらつてくるケースが多い。中にはゴミ収集でもお断りせざるを得ないような汚れたものもないわけではないので、ゴミ拾いと言われても言い返す言葉はない。

処分を依頼された十数枚の書額に混じつて、「明治壬午 (みずのえうま) 晩秋書於飯田客以」の書き込みがある「松間茶味清」(写真) の横額が見つかった。例の通り、仲間の「ああだ、こうだ」推論が始まる。贅の干支をなんとか判じ、添えられた落款(らつかん)を見ると

「東作」と読める。干支を調べると「壬午」は明治15年、もしやと思つて、作成中の文学史年表を繰ると、その年10月28日に「目下部鳴鶴 (東作) が天龍峽に

遊び、岩峯十勝を選ぶ」とメモがある。つまり、この書額、今から130年前、中林梧竹・巖谷一六と共に明治の三筆と呼ばれた近代書道の確立者の一人、目下部鳴鶴が天龍峽来遊の際、乞われて揮毫したモノではないかというのだ。鳴鶴はその折、天龍峽の10の奇岩を選定し「天龍峽十勝」と命名、それぞれに自筆の銘を彫つた。幕末、漢学者の阪谷朗廬が命名した天龍峽が、この鳴鶴の十勝を得て、近代の観光地として文人墨客文化人の注目するところとなつた記念すべき出来事だが、この書は、その、まさに歴史的瞬間に書かれた可能性が強い。

明治15年暮れといえ、その年の1月9日発刊された「深山自由新聞」が出しては発行停止になり、経営が立ち往かなくなりつつある反面、

もある、嗚呼。(嶋)

翌16年には愛国正理社が飯田にも出来、平民の救済と権利獲得に動き出していた。さらに翌17年暮れ、明治政府に対して挙兵計画準備したとして発覚する「飯田事件」前夜である。

松籟に耳を傾け茶をいただきながら静かな時を感じる階層がある一方では、人間としての権利獲得に地を這うような時間を生きていた人々がいたことに思いを馳せるのである。

書額の美術的価値は問わない。痛みや汚れも目立つものの、当地にとつて、なかならず天龍峽にとつて、歴史的な価値のある額ではないか(推理)…。と、これが、ブレインストーミング(集団思考)の醍醐味であり、知の発見に遭遇した愉楽(ゆらく)だ。一文の得にもならないが、ゴミ拾いに嵌(はま)つてゆく所以(ゆえん)で